



Good News for Japan

魂の救いのために



寺澤 眞由子

平成二十五年七月一日発行
昭和二十二年一月二十四日(第三種郵便物認可)

明治二十八年創刊 毎月一日・十五日発行



救世軍発祥の地、東ロンドンのホワイトチャペルに立つ創立者の像。創立の精神は、今も世界中の救世軍の信徒に受け継がれている。

時代が人を生み出すのか、人が時代を作り出すのか。確かに言えることは、今から百四十八年前、英国の東ロンドンでなされた一人の牧師の決断が、百十六の国と地域で活動する救世軍を誕生させた、ということである。

命名される「東ロンドンクリスチャン伝道会」を立ち上げたウィリアム・ブースの心にあったのは、「ただ一人の魂もイエス・キリストの救いからこぼれ落ちるべきではない」という、「魂の救い」のための働きであった。

英国はキリスト教国であるにもかかわらず、産業革命によって拡大した貧富の差は、貧しさの中にある人々から、教育はもちろん、救いをも遠ざけていた現実があった。後に「救世軍」と

さつて急を要することが、ほかにあるのか。」
食事や衛生も、家畜以下の生活を強いられた、身体も心も荒廃した人間社会がそこにあり、そして救いを必要としていた。



1880年、救世軍の「一銭朝食」に並ぶ子どもたち。東ロンドンでの活動当初は、貧しい人々に食事や日用品を提供することに難色を示していた。自分たちの働きがそれら慈善活動に終始してしまつてはならない。しかし、最悪の環境の中で、救いの必要すら感じていない、魂の麻痺した状態の人々に救いへの求めを起こさせるために、最低限の食物と衛生的な環境が不可欠であることを知った彼は、「魂の救い」のためにそれらを積極的に提供し始めたのである。

最後にあなたに聞きたい。「あなたはイエス・キリストの救いを知っているか?」「あなたは、闇でなく光に生きている、と言うことができるか?」「あなたは救われているか? 救われるべきではないか?」
あなたの「魂の救い」のために救世軍は存在している。ウィリアム・ブースが現代、日本で語るとしたら、こう言うに違いない。
「あなたはいくつ救われるべきだと考えているのか? 今でしょ!」と。

(救世軍士官(伝道者))

新約聖書において、イエス・キリストの救いを力強く広めた足跡を最も多く残している伝道者パウロは、自らその救いにあずかった時、イエスによって次のような使命を与えられた。
「わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタン支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである。」
(使徒言行録26章17-18節)
ウィリアム・ブースも、イエス・キリストからこの使命を与えられ、東ロンドンに、やがては世界中に救いをもたらしたのであった。彼は「魂の救い」のため

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。
一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

時代を経て、世界中で、あらゆる困難や悲惨な状況の中にある人々の中へとその活動が広がっている今日にも、救世軍の使命は「魂の救い」である。そして、かつての東ロンドンの対極のような地域にあり、経済的豊かさを享受しつつ、生き

る目的や希望を失っている人々にも、「魂の救い」への求めを喚起し続けている。
この、「ときのかえ」と名付けられ、世界中で発行されている伝道機関紙は、効率的に福音を伝えるために、創立当初から活用され、存在しているのだ。
最後にあなたに聞きたい。「あなたはイエス・キリストの救いを知っているか?」「あなたは、闇でなく光に生きている、と言うことができるか?」
「あなたは救われているか? 救われるべきではないか?」
あなたの「魂の救い」のために救世軍は存在している。ウィリアム・ブースが現代、日本で語るとしたら、こう言うに違いない。
「あなたはいくつ救われるべきだと考えているのか? 今でしょ!」と。

7月2日は
救世軍創立記念日
今年は148年目です

〈信仰の体験談〉

イエス・キリストを信じて
人生観が変わった！

石川 裕敏



神様に会おう前の私は死んでいたのだと思います。

「正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。」
(テモテへの手紙 1 6 章 11 ～ 12 節)

今年三月、突然七十二歳

で天に召された父石川寿顕の愛唱聖句です。父は、救

世軍で日曜におこなわれる聖別会（礼拝にあたる）での

証しの時（信徒が信仰の体験談を自由に話す時間）、いつも

この御言葉（みことば）を読み上げていました。中でも特に柔和さを求めたいと願っていました。

信仰の歩みを共にするかけがえのない存在を亡く

した悲しみは深いですが、天国で永遠の命を手に入れ

喜ぶ父の姿を思い、慰められています。

イエス・キリストを信じ

て私の死生観は変わりました。死はみじめなものでも、恐ろしいことでもない。むしろ新しく歩み始める時であり、神様にすべてを委ねたその先には、天国があること、私たちの命は多くの残酷な死の上に空ろに成り立っているのではないことを知ったからです。

父もまた、それらのことを自らの葬儀を通して残された者のために証ししました。参列者の方々が

「救世軍の葬儀のすばらしさに心打たれた」と言ってくれました。それは、父は消えてなくなったのではなく、希望と喜びへ

出発したことを、式全体、また小隊長（牧師にあたる）の

メッセージを通して皆が理解したからだと思っています。

父の葬儀をすばらしい最後

の証しの時としてくださった小隊長夫妻には、本当に感謝しています。

またその席で、父が出会う人毎にイエス・キリストを常に宣べ伝えていたことを知りました。父の信仰は熱かったのだと思いました。イエス・キリストを父に伝えることができて良かった、父も素直に信じてくれて本当に良かった、と感謝の思いでいっぱいになりました。後悔はありません。

私は高知県の香北町という、周りを山に囲まれた自然豊かな所で伸び伸びと育ちました。母とよく山菜を取りに行ったり、近所の川で友達と夕暮れ時まで泳いだり、自然を満喫することのできた学童期でした。

その頃買ってもらった玩具のようなカメラで、両親や友人また風景を撮影しては、白黒写真の中に写る被写体の豊かさや不思議さ、愛おしさを楽しんでいました。中学、高校と写真部に属し、すっかり写真の奥深さに魅了された私は、高校卒業後、横浜の写真専門学校に入学しました。そこで出会ったのが妻の薫でした。

底抜けに明るい彼女は、土佐弁の抜けない田舎者の私に、東京の街をよく案内してくれました。そんな彼女を両親に紹介しようと思

知に帰省した際、祖父の興じた建設会社で、父の下、働くことを決意したのです

そして、当時働いていた写真スタジオをやめて高知に戻りました。

父は、専門知識のない私に、深夜まで図面の読み方、書き方、各種計算の方法、測量術を、本当にうれしそ

うに教えてくれました。父と子で共に汗を流し、働いたことは私の宝です。

故郷に帰り、結婚し、生活も仕事もすべて順調でした。長男大翔も授かりました。しかし、なぜか私の心はどんどん傲慢になっていきました。驕り高ぶり、心の荒んだ三十代を過ごしました。悪い思いが私の心の中には、たくさん詰まっていた。些細なことでもよく他人に暴言を吐き、自己中心的で憐れみの無い人間でした。家族に対しても怒りっぽく、不平不満が充満し、何事にも批判的でした。イエス・キリストと出会った。父は、専門知識のない私に、深夜まで図面の読み方、書き方、各種計算の方法、測量術を、本当にうれしそ

うに教えてくれました。父と子で共に汗を流し、働いたことは私の宝です。

故郷に帰り、結婚し、生活も仕事もすべて順調でした。長男大翔も授かりました。しかし、なぜか私の心はどんどん傲慢になっていきました。驕り高ぶり、心の荒んだ三十代を過ごしました。悪い思いが私の心の中には、たくさん詰まっていた。些細なことでもよく他人に暴言を吐き、自己中心的で憐れみの無い人間でした。家族に対しても怒りっぽく、不平不満が充満し、何事にも批判的でした。イエス・キリストと出会った。父は、専門知識のない私に、深夜まで図面の読み方、書き方、各種計算の方法、測量術を、本当にうれしそ

うに教えてくれました。父と子で共に汗を流し、働いたことは私の宝です。

故郷に帰り、結婚し、生活も仕事もすべて順調でした。長男大翔も授かりました。しかし、なぜか私の心はどんどん傲慢になっていきました。驕り高ぶり、心の荒んだ三十代を過ごしました。悪い思いが私の心の中には、たくさん詰まっていた。些細なことでもよく他人に暴言を吐き、自己中心的で憐れみの無い人間でした。家族に対しても怒りっぽく、不平不満が充満し、何事にも批判的でした。イエス・キリストと出会った。父は、専門知識のない私に、深夜まで図面の読み方、書き方、各種計算の方法、測量術を、本当にうれしそ

うに教えてくれました。父と子で共に汗を流し、働いたことは私の宝です。

故郷に帰り、結婚し、生活も仕事もすべて順調でした。長男大翔も授かりました。しかし、なぜか私の心はどんどん傲慢になっていきました。驕り高ぶり、心の荒んだ三十代を過ごしました。悪い思いが私の心の中には、たくさん詰まっていた。些細なことでもよく他人に暴言を吐き、自己中心的で憐れみの無い人間でした。家族に対しても怒りっぽく、不平不満が充満し、何事にも批判的でした。イエス・キリストと出会った。父は、専門知識のない私に、深夜まで図面の読み方、書き方、各種計算の方法、測量術を、本当にうれしそ

うに教えてくれました。父と子で共に汗を流し、働いたことは私の宝です。

長男の不登校と心の葛藤……それらに對して、主イエスは私の心の備えをしてくださったのだと思います。私を愛してくださる神様を知らなかったらどうなっていたか、苦難の時、御言葉にすることができなかつたならばどうなっていたか、恐ろしい思いがします。人生で一番大切なことは真の神様を知ることです。それに尽きます。

「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」(ヨハネによる福音書 20 章 29 節)

信じない者から信じる者に変えられた私への、主イエスの慈愛に満ちた戒めの言葉だと感じております。

新約聖書に記されているイエス・キリストの言葉は、常に大きな挑戦です。それらは単なる努力目標ではないように思います。すべては、そのまま生きる(応答する)に値する言葉です。確かに、それを実行しようとする困難を覚えることもあります。しかし御言葉を生活の中で味わいながら、それは私の命の糧となりました。

日常の様々な場面に応じて与えられる御言葉への応



2009 年 12 月 20 日、クリスマス礼拝の時、私の兵士入隊と父の准兵士宣言をおこなった。



2010 年、全国大会で兵士入隊をした父 (左側)

答は、イエス・キリストへの信仰と祈りにおいてのみ可能である、と最近思うようになりました。私を救うために十字架の上で死んでくださったイエス様に感謝し、愛するがゆえに、昔は許せなかつた事も今は許せるようになったからです。自分自身の小さなこだわりやしがらみから身動きが取れなくなる道ではなく、真理によつて自由になる道こそ、イエス様が共に歩んでくださる道です。それは結果的に心が穏やかな方を選挙することでもあります。神様が私を無条件で愛してくださっていることを知って、私の人生観は変わりました。優しい顔になった、言葉にとげが無くなった、と妻や友人にも言われます。妻は、一緒に小隊に出席してくれるようにもなりました。

五月十九日、ペンテコステ(イエスの弟子たちに聖霊が降ったことを記念する日)サンデーの日、妻と長男の准兵士宣言(将来、正式に救世軍の信徒となる約束を、会衆の前で公にすること)がありました。長男は精神的につらい時期もありました。またそのことで、家族が悩み苦しむ時もありました。しかし神様は私たちの心の叫びと祈りを聞いて、一人ひとりをしっかりと守っていてくださることを知らせてくださいました。そして二人はイエス・キリストを信じました。成人の日の記念として救世軍の本部から贈られた聖書を前に、息子が「二十年生きられて良かった」としみじみと言った時、父

親らしいことがあまりできなかった心苦しい思いとともに、それにもかかわらず神様は彼を支え育んでくださったことを、家族で感謝しました。



高知小隊前で妻(左端)と息子(右端)

の精神的な影響力には目覚めます。私たちの家族も、高知小隊で隊長の歌声もすばらしく、救世軍で歌う賛美歌に親しんでおります。特に「みひかりをもて」という賛美歌は、私の心を整えてくれる歌です。神様の光で心を照らしていただき、御心に添わないものがないか省みる、という内容の歌です。

葉です。主イエスを知る前の自分の人生は空っぽでした。この空虚な思いを他の人には味わってほしくない、と強く思います。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」(使徒言行録 16 章 31 節)

私たち家族が体験したこの御言葉を伝えたい、そして何より、イエス・キリストの愛を次の世代の人たちに知ってほしい、と願っています。そのために「心は神に手は人に」という救世軍のモットーにふさわしい兵士としての歩みを進めていきたい、と思っています。

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるように、逃れる道をも備えていてくださいます。」(コリントの信徒への手紙一 10 章 13 節)

苦しい時、先行きの見えな暗闇の中で、私たちに与えられた御言葉です。

「キリストを信じる人たちの交わりは、人を輝かせ明るくするのだなあ」と思われる出来事がありました。五月に、大阪で、救世軍の女性の集まりがあり、妻と息子が出席しました。帰って来た時、二人の表情は実に生き生きとしていました。

クリスチャンの、他者へ

私の人生の時間もすでに午後には差しかりました。「だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をやるにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」(コリントの信徒への手紙一 10 章 31 節)

これは、新しくされた私の行動基準となつている御言

□ 私の近くの救世軍を紹介してください。
□ キリスト教についてもっと知りたいです。
□ 「ときのかえ」の購読を申し込みます。

ご氏名
ご住所

この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。

四月から、生涯学習として放送大学に入学し、心理学を専攻しました。この学びが小隊での伝道活動の一助になれば幸いです。

冒頭に記した、父が愛した聖句を、私もこれからの人生に掲げて、イエス・キリストの下で生かされたいと願っています。

(高知小隊(教会)所属)



世界をみつめて

〈アメリカ合衆国〉竜巻被災者支援

5月20日、オクラホマ州を巨大な竜巻が襲い、オクラホマシティ南部のムーアでは、子ども10人を含む24人が死亡、237人の負傷者を出しました。竜巻は、半径約2キロ、風速約90メートルで、米気象局は「EF5」に相当する最強クラスである、と発表。竜巻の通り道にある家屋は、2つの小学校を含めことごとく倒壊しました。救出作業には、地元の警官、消防士、州兵、また多数のボランティアがあたり、瓦礫の下から100人以上の生存者が救出されました。また、5月31日にも同地域やミズーリ州、イリノイ州で5つの竜巻が発生し、激しい雨による洪水も引き起こされました。これまでに子ども2人を含む9人が死亡、約70人が重軽傷を負いました。また、多数の家屋に被害が出、20万世帯が停電しました(6月5日現在)。



現地の救世軍災害被災地支援チームは、5月20日の竜巻発生直後から、救援活動を開始。22台のキャンティンカーを出動させ、被災地の住民や救援活動に従事する人々に、朝・昼・晩の食事と飲み物を提供する一方、バケツやモップその他の掃除用品の配布や倒壊した家屋の片づけなどをおこないました。また、5月31日の竜巻・洪水発生以降、広範囲にわたる被災住民の必要に応じて、食糧、衛生用品、掃除用品を配布するとともに、経済的支援や救世軍のファミリーストアでの衣料品引き換え券の提供、また心のケアもおこなっています。

〈チェコ共和国〉洪水被災者支援

6月1日から3日にかけて、ヨーロッパ中部(ドイツ、オーストリア、スイス、チェコ)が記録的な豪雨に見舞われました。河川の氾濫による洪水や土砂崩れで、道路や鉄道が寸断され、死者・行方不明者、また数千人の避難者が出ています。

チェコ共和国では2002年以来の大洪水で、政府は非常事態を宣言。首都プラハではブルタヴァ川の水位が上がり、地下鉄の運行が停止されました。この洪水で、6人が死亡、3,000人以上が避難を余儀なくされています。被害を受けなかったプラハの救世軍ホステルは、行政の要請により、臨時のベッドを用意して街頭生活者や被災者を受け入れ、食事を提供しました。6月3日の夜は、被災者22人を含む108人がホステルで、56人が夜間シェルターで、夜を明かしました。救世軍は献金を募り、支援活動を続けています。

〈日本〉東日本大震災被災地復興支援リポート(続)

宮城県南三陸町で5月に起工したポータルセンター(仮設大型テント・多目的ホール)建設は、8月の初めに完成する予定です。また同町の商工会議所(仮庁舎)の移設は6月に完了し、業務が開始されています。救世軍はそれらの建設に関わる費用を支援しています。



移設された商工会議所

6月中旬には、北海道チームが岩手県陸前高田市を訪問し、身体障がい者通所施設や2つの保育園、仮設住宅数箇所、金管バンドの演奏、けん玉による交流や食事会をもちました。震災から2年以上過ぎましたが、なかなか町の復興が進まず、先の見えない不安やストレスを感じている方々に、少しでも寄り添い、できるだけの支援を、これからも救世軍は続けていきます。

2013年
克己週間募金
結果報告

この度の克己週間募金(3/1~4/30)へのご協力、ありがとうございました。心からの感謝とともに、右のとおり結果をご報告申し上げます。

	(単位:円)
北海道地区	798,050
関東東北地区	1,833,200
東京東海地区	8,126,417
西日本地区	2,798,712
医療部	595,202
社会福祉部	2,079,313
士官学校	1,600,000
本営(本部)	297,309
全国合計	18,128,203

(2013年5月31日 現在)

◆ 創立記念野外コンサート ◆

6月9日、日曜の午後、日比谷公園小音楽堂でおこなわれました。公園にきた大勢の人が、涼しい木陰でプラスバンドの演奏や合唱に耳を傾けていました。



唱歌隊(聖歌隊)



ジャパン・スタッフ・バンド

救世軍とは

The Salvation Army

プロテスタントのキリスト教会で、世界百二十六の国と地域で働きを進めています。

創立者はイギリスのメソジスト教会牧師だったウィリアム・ブラス。一八六五年、ロンドンの貧しい人々、社会から顧みられない人々の物心両面からの救いを目指して、この働きを始めました。百四十八年経った今もその精神は変わらず、助けを必要としている人々のニーズに応えながら、神様の愛を伝えていきます。

日本での働きは、一八九五(明治28)年に始まりました。その当初から、刑を終えて出てきた人々の保護や職業訓練、災害被災者慰問、失業者のための職業斡旋、廃娯運動の推進、結核療養所の設立、子どもの保護……などを積極的におこない、明治、大正、昭和初期の社会福祉史に、先駆者としてその足跡を残しました。

現在は、四十五の小隊(教会にあたる)と十一の分隊(伝道所にあたる)、二十の社会福祉施設、二つの病院(ホスピス併設)を通して働きを進めるとともに、街頭生活者支援や災害被災者支援など様々な社会奉仕活動をおこなっています。

(取扱支部)

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

発行日及び定価

発行日 毎月一日・十五日
定価 一日号 一部五〇円(二六〇円)
十五日号 一部六〇円(二六〇円)

クリスマス特集号 十二月一日号
一部一〇〇円(二六八円)
一年分 二七〇円(送料七二八円)
振替 〇〇一八〇五五四四〇〇

発行兼印刷人 救世軍
代表者 勝地 次郎
編集人 齋藤 恵子

〒101-0051 東京都千代田区
神田神保町二丁目十七

電話 東京(03)三三七〇八八一

発行所 救世軍本営

印刷所 図書印刷株式会社